自 然 と 音 楽

島　　巖

人は何かに感動を覚えると、それをいろいろな方法で表現する。例えば美しい景色に出会った時には、誰でも心の中に自然に「ワー……！」という気持ちが湧き上がる。その気持ちが実際に声として出たり、その声が言葉になり、そして和歌や俳句や文章になったり、その景色を絵に描いたり写真に撮ったりして、そのときに覚えた感動をそれらの媒体を通じて表現しようとする。

古代の昔から、人は自らの感慨や自然の美を言葉や絵画で描写し表現してきた。言葉は詩となり、詩にリズムと抑揚をつけて朗誦すれば更に心に響く。

音楽と言葉はこのようにして密接に結びつき、歌曲として具体的な内容を表現する音楽となった。自然を歌ったものも、声楽曲から童謡に至るまで沢山作られている。

古来多くの作曲家によって有名な歌曲が多数作られてきたが、楽器の表現力と演奏技術の進歩によって、歌詞のない器楽曲だけで具体的な内容を表現する曲も作曲されるようになった。所謂「標題音楽」といわれているものがそれで、自然の風景や動物などを描写したものなど大変興味深く聴いており、これらについて紹介したい。

小川のせせらぎや雨の音、風や嵐や雷の音、動物の鳴声や馬の足音など、実際に聞こえている音の描写の他に、雄大な風景や日の出・日没・月光など音の発しない自然現象を音によって表現し、聴く者の脳裏にその光景を浮かび上がらせる手法は唯々感じ入るしかない。

「標題音楽」としてよく知られているのは、イタリアの作曲家もヴィヴァルディ（1678 ～ 1742）の作品「四季」（1725）である。これは１２曲からなるヴァイオリン協奏曲で、この第１曲から第４曲に夫々春・夏・秋・冬と表題が付けられており、鳥の声など夫々の季節に応じた雰囲気を醸し出している。

本格的な「標題音楽」しとてまず第１番に挙げられるのは、ドイツの作曲家ベートーヴェン（1770 ～ 1827）による交響曲第６番「田園」（1818）で、この曲は第５楽章まであり、各楽章には夫々「田舎に到着した時の晴れやかな気分」、「小川のほとりの状景」、「農民達の楽しい集い」、「雷雨、嵐」、「牧人の歌－嵐の後の喜ばしい感謝に満ちた気分」と表題が付けられている。この曲を聴くと、夫々の楽章に付けられた表題の光景が眼前に浮かぶようで、中でも第４楽章の「嵐」の自然描写は素晴らしい。

風景の描写では、ロシアの作曲家ボロディン（1833 ～ 1887）による交響詩「中央アジアの草原にて」（1880）が特に印象的である。この曲を聴いていると緑に覆われた草原が何処までも果てしなく地平線まで続いている雄大な風景が、実際にそのような景色を見たこともないのに、広々と眼前に拡がってゆく。そして、突如として斜め前方から一団の騎馬軍団が近付き、旗を翻し目の前を駆け抜けて行く。このようなイメージがスクリーンの映像を見ているようなリアルさで脳裏一杯に広がる。

広大な風景といえば、ノルウェーの作曲家グリーク（1843 ～ 1907）の「ペールギュント」より第１曲の「朝」（1847）がある．この曲はサハラ砂漠で迎えた日の出の様子と、そのときの爽やかな気分を描き出したもので、聴いていて眼前に広々とした空間の拡がりが感じられ、太陽は何の音も立てずに昇って行くのに、その音楽からは太陽が昇るにつれて、暖かい日光が辺りに満ちてくる様子が感じられる。

ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス（1864 ～ 1949）の作品「アルプス交響曲」（1915）は表題が実に緻密である。この曲は、作曲者本人が登山した夜明けから夜に至るまでの、一日の状況を一つの曲に纏めたもので、「夜、日の出、登り道、森への立ち入り、小川に沿っての歩み、滝、幻影、花咲く草原、山の牧場、林で道に迷う、氷河、危険な瞬間、頂上にて、見えるもの、霧が立ち昇る、次第に日がかげる、哀歌、嵐の前の静けさ、雷雨と下山、日没、終末、夜」と、５０分の間に２２もの標題が付けられており、夫々の状況が種々の楽器を駆使して克明に表現されている。

オーストリアのヨハン・シュトラウス２世（1825 ～ 1899）の作品は、「ウイーンの森の物語」、「雷鳴と電光」、「春の声」、「美しき青きドナウ」等、ウインナワルツを代表する曲とも言われて有名である。

ドナウ川の自然は作曲家の興味を惹くのであろうか、ルーマニアの作曲家イヴァノヴィチ（1845 ～ 1902）もこの川を題材にして「ドナウ川のさざ波」（1889）と名付けたワルツを作曲した。

イギリスの作曲家ホルスト（1874～ 1934）は地球上の風物より宇宙に目を向け、組曲「惑星」（1916）を作曲した。この組曲は７曲で構成され、水・金・地・火・木・土・天・海の７つの惑星に、夫々の占星術上のイメージを重ねて曲をつけた。中でも「木星」は有名で、この曲の第４主題のメロディは、雄大ながらも牧歌的な懐かしさを感じさせる趣があり、イギリスではこの曲に歌詞が付けられ、愛国的な賛歌として親しまれ歌われているとの文献もある。

自然の風物に基づいた曲は多く、動物を描いた名曲も多数あるが、残念ながらここで紙面が尽きた。